香川大学教育学部

附属坂出学園だより

第41号　2012.3

１年演劇「クロワッサン」

２年演劇「はるふぶき」

瀬戸大橋

目　次

・今，学園では
　幼稚園　p２
　小学校　p３
　特別支援学校　p４・５
　中学校　p６
　特別支援教室「すばる」　p７
・ＰＴＡ活動（松韻会・親和会）　p８・９
・坂出学園１～３月のあゆみ　p10

研究主題　幼児教育の質を高める計画と実践の在り方を考える
～主体性と協同性の視点から～

１月27日，第57回附属幼稚園研究発表会を開催しました。北海道や宮城県など、県内外より250名の参会者をお招きし，盛会に終えることができました。

附属幼稚園では，幼児期に育みたい主体性と協同性に視点をあてて，保育計画と実践の質を高めようと研究を進めています。

以下，具体的な実践を紹介します。

≪日程・内容≫

9：00～10：50　公開保育
11：10～12：00　全体会（開会式・研究経過報告）
13：00～14：10　分科会
　協議テーマ
　「主体性と協同性を，どう見つめ，育んでいくか」
14：30～16：00　講演
　内田伸子先生　お茶の水女子大学客員教授
　「子どものウソは「嘘」か？子どもの創造的想像力を育てる保育者の役割」

■５歳児実践例■

――母の日の集いに向けて･･･34人が心をつなぎ，高め合って――

＜事例研究＞

例年行う母の日の集い。しかし，例年行うからではなく，子どもたちがお母さんへの思いを膨らませたり，母の日の集いで何をしたいのか話し合ったりし，そのしたい思いが実現できる喜びを実感できるよう手助けしたいと考えました。

教師が「どんなお母さんが好き？」と子どもたちに投げかけると，子どもたちは自分の母親への思いを嬉しく伝えたり，友達の母親への思いに関心をもって聴こうとしたりする姿がありました。そのうち，「何かプレゼントをしよう」という提案が子どもから上がり，教師がそれぞれの子どもたちの思いを受け止めたり整理したりする中，話し合いはどんどん盛り上がっていきました。この話し合いを通して，子どもたちの『大好きなお母さんを喜ばせたい』という内面の思いが繋がり，高まり合い，共通の目的となっていきました。そして，一人ひとりがその目的に向かって自分なりに思いを工夫して表現したり，互いの思いを感じ合い認め合ったりしながら，母の日の集いを心待ちにしていたのです。

このような経験は，これからの遊びや生活の中で，一人ひとりが自分の思いを出しながら，友達の思いも認めながら，協力・工夫して進めていこうとする意欲や態度に繋がっていくと考えます。

＜主体的に取り組め，互いを感じ合える環境づくりの工夫＞

（ワイヤー）
自分の名前シールがついたクリップに，ちょうどいい長さのワイヤーをつけたものを入れておくことで，やりたい時に取り組むことができる。また，ビーズを通し終わったストラップをこの中に入れる。

（コーナーの広さ）
友達を感じ合えるちょうどいい広さにしておく。

（作り方を図で描いた紙）
言葉だけの説明より伝わりやすく，自分で確認しながら作っていく姿がある。

（ビーズの入れ物）
１人，または２人に一つ程度の小分けした容器にビーズを入れておくことで，じっくりと取り組むことができる。

※　私たちは，入園から修了までの日々の実践において，上記のように主体性や協同性を育む際に大切にしたい子どもの見方やかかわり方、環境構成について，事例研究等を通して具体的に検討していくと同時に，この研究成果を本園の指導計画に盛り込むことで，保育の質をさらに高めようと研究を進めています。

知の更新をめざした「思考力」の育成（３年次）
－思考様式を共有化するユニバーサルデザインの授業づくり－

１月26日（木）27日（金）の両日，第95回教育研究発表会を開催いたしました。北は北海道，南は長崎県と，県内外よりのべ約1200名の先生方にご参会いただき，盛会裏に終えることができました。

本年度は，学習集団全ての子どもの「思考力」を育成することをめざして，自力解決の前後の場面では思考様式の共有化に向けてユニバーサルデザインの働きかけを行い，自力解決場面では極力，支援を控え一人ひとりの思考を保障する授業づくりに取り組み，研究授業や協議会等を通して提案いたしました。

一部ではありますが，次に研究会での授業の様子を紹介いたします。

●●● 研究授業 ●●●

４年　体育科「めざせタッチダウン　～フラッグフットボール～」

宮崎　彰

中学年のゲーム領域では，簡単な作戦を立ててゲームを行うことがねらいとされています。子どもたちも，作戦を考えることは楽しく，しかも大切なことだと感じています。ただ，これまでのゲームでは，作戦を生かした攻撃より，個人の技能を生かした攻撃によって得点につながる場面が多くありました。そのため，作戦の意味や効果を十分につかむことができていないことが考えられます。そこで，全員に明確な役割がある作戦を考えれば，その作戦がゲームに有効に働き，さらには得点にもつながることをとらえさせたいと考えました。

本時では，作戦がうまくいかないというチームの課題を取り上げ，どうすれば作戦をゲームに生かすことができるか考えていきました。まず，前時，作戦がうまくいったチームの動きを取り上げてみると，「ブロックをする人はブロックする相手ばかり見ている。」という反応が出されました。その反応を基に，それぞれの役割ごとに対象となる人に目を付け，その人の動きに併せて自己の動きを工夫すればよいことに気付いていきました。ただ，作戦の中には多様な動きが混在しているため，個々の動きをとらえられない子どもがいました。そこで，見通しの場面において，一人一人の動きを一枚ずつの透明のシートに表した作戦ボードを準備し，個々の動きをとらえたり，シートを重ねることで全体をとらえたりすることができるようにしました**（部分的な動きと，全体的な動きとを組み合わせた教材）**。すると子どもから「この作戦では，僕はこの動きだけすればいいんだ。」「一人一人の動きが集まると，こんな作戦になるんだ。」と，作戦の全体から個の動きをとらえたり，個の動きから作戦の全体をとらえたりすることができました。

【作戦ボードで動きを確認】

後のゲームでは，これまで作戦を十分理解できていなかった子どもも，自分の動きを的確にとらえることができ，対象となる人を意識してゲームに取り組むことができました。そのような中，初めてタッチダウンを成功させることができた子どもが現れました。その子に，なぜタッチダウンができたのか理由を尋ねると，「僕は走る役割だったので，作戦通りフェイク（手渡しするふり）して，ブロックしてくれる人と，タグを取りにくる相手を見ると，端っこの方が空いていたからそこに走り込んだ。」と，作戦を立てて攻撃することのよさをとらえることができました。

【作戦を生かした動き】

５年　理科「発見！電磁石の秘密　―『電流が生みだす力』―」

森　真佐純

５年生における電気の学習は，電磁石を教材に使用します。その際，子どもたちは３年生で学習した「磁石のはたらき」と４年生で学習した「電流のはたらき」をつないで考えます。本時子どもたちは，「電磁石の巻数を増やすと，磁力は強くなるだろうか」と考え，電磁石の巻数を増やす実験を行いました。

実験では，電流の強さや，ボビンに巻くエナメル線の太さや長さ，芯材等の条件をそろえ，巻数だけを変えておこなうことを確認しました。子どもたちは全員「ボビンコイルの巻数を増やすと磁力が強くなるだろう」と予想しました。

【磁力をテスラメーターで計測】

実際に，ボビンコイルの巻数を100回から200回に増やし，電磁石の磁力が強くなることを，磁石に付くクリップの数とテスラメーター（磁力を測定する器具）の数値の増加により確認しました。しかし「巻数を増やすと磁力が強くなる」という結果を確認しても，どうして強くなったのかはまだ十分に説明できないままでした。

そこで，磁力の強さを瞬時に数値で表すことのできるテスラメーターの特性を生かし，一巻き増やすごとに磁力の変化を確認し，導線の重なりに併せて磁力も重ね合わされていることを見つけていきました。この活動により，本時ねらっていた「巻数」と「重なり」の視点から，電磁石の磁力の変化をとらえることができました。**（振り返りの場面でのユニバーサルデザインの働きかけ）**

【イメージ図で説明】

最後に，巻数を２倍にした時の様子をイメージ図にかき，前時学習した電流を２倍にした時のイメージ図と比較しました。すると子どもたちは，電流を２倍にする操作と，巻数を２倍にする操作は磁力を強くするという観点から考えると同じ効果があったということに気づき，スマートボード上で，２つのイメージ図を比較しながら説明しました。

第16回教育研究発表会

子どもの主体的な社会参加をめざして
～ポジティブな人間関係をはぐくむことを視点とした授業づくり～

１月21日（土），第16回教育研究発表会を開催いたしました。土曜日開催であったにもかかわらず，教育関係者をはじめ福祉関係者，保護者等，県内外から350名を越える方々にご参会いただき，盛会となりました。

今回の研究では，研究主題を「子どもの主体的な社会参加をめざして～ポジティブな人間関係をはぐくむことを視点とした授業づくり～」とし，日々の授業実践をとおして研究してきた成果を，研究・公開授業やポスター発表，話題提供，分科会をとおして提案いたしました。また，岐阜大学大学院教育学研究科教授の平澤紀子先生の講演会においても，本校の研究主題に沿って，午前中に行った研究授業に解説を加えながら，分かりやすくお話いただき，参会者から大変好評でした。

今回の研究発表会をとおして，児童生徒が友だちとやり取りしながら主体的に授業に参加する様子や，そのための支援環境の工夫等について，本校の取り組みを全国に発信できたと思います。参会者からいただいたたくさんのご意見を，今後の教育活動に生かしていきたいと思います。

小学部

小学部では，教科別の指導「ことば・かず」を対象教科として取り上げ，児童一人一人が役割を担い，友達や教師とかかわり合いながら教科のねらいを達成していく授業の実現をめざしてきました。

研究大会では，研究授業「わたしの好きなものを伝えよう～味や食感を表す言葉を使って～」を提案しました。毎日食べている給食メニューをテーマに，ふわふわ，サクサクなど食感を表す言葉を用いて自分の好きなメニューを表現し，相手に伝える力を養うことがねらいの授業です。電子黒板や携帯情報端末等の支援ツールを活用することで，児童同士でクイズを出し合ったり，発表の仕方を評価し合ったりするなど，積極的に課題に取り組む姿を実現することができました。

また，分科会では，授業後のアンケートや質問から「学習内容」「評価」「児童の役割」「児童同士のやり取り」「ICTの活用」などについて話し合いました。特に，教師の直接的な支援の精選や支援ツールについて「明日からの授業に取り入れられそうだ」という感想が多く見られたことから，授業づくりをテーマにしたことは，参会者のニーズに沿ったものであったと確信しました。

中学部

中学部では，「パワーアップタイム」（コミュニケーションや社会性に焦点をあて，少人数課題別グループで行う，各教科等を合わせた指導）の授業を取り上げて，ポジティブな人間関係をはぐくむことを視点とした授業改善を行ってきました。

教育研究大会当日には，この「パワーアップタイム」の授業を３本公開しました。そのなかでも，「虹のクレヨングループ」では，「自分の身近な出来事をみんなに伝えたい！」という生徒の願いを実現するなかで，伝わりやすい話し方や相手を意識した態度を身に付けることをねらいとした授業が行われました。「虹のクレヨンニュース」を作成するために，教室をテレビスタジオに見立て，ディレクターやカメラマン，原稿係，スターターの役割を生徒が分担し，協力してニュース番組の撮影を行いました。お互いが声をかけ合い，協力し合いながら，いきいきと活動する姿を参観者に見ていただくことができました。また，自分の読んだニュースが伝わったのかを評価するために，様々な評価場面を設定し，携帯情報端末を活用する様子も見ていただけました。

授業後の分科会には，80名近い参会者がありました。討議では，事前のアンケートでいただいた携帯情報端末活用に関する質問や授業改善に対するご意見などに答える形で行いました。互いに意見交流しながらの充実した分科会になりました。

高等部

高等部では，卒業後に視点をあてて社会参加をしていく力を育成するために，研究対象教科を「職業科」としました。教科のねらいを軸に，主体的な学習の参加を促すための必要な支援や支援者としてのかかわり方等について検討を重ねてきました。

研究授業は「自分再発見！～３年生の現場実習に向けて～」という題材を取り上げ，現在働いている先輩が在学中に経験した現場実習の様子をインタビューする活動をとおして，「自分だったらどうだろう」と自分を見つめ直す場として学習機会を設定しました。学習活動のなかには，生徒自らが実物投影機の設定をしたり，自分たちで話し合いを進めたりする活動もあり，生徒の主体的に動く姿を参観していただくことができました。

公開授業は「好きな仕事，苦手な仕事」という題材で，いろいろな職種の作業に取り組む様子を生徒同士で評価することで，自分の客観的な理解に結びつける内容でした。作業の様子を見て，互いに評価して，その評価を話し合いました。生徒同士で話し合いを進行する様子を参観していただくことができました。

分科会では，めざすべき生徒像，身に付けておくべき習慣やスキル等，キャリア教育に関わる質問も多く，それに伴って他校の進路学習の取り組みを拝聴することができ，見識を広げることにつながりました。

CAN2012 がスタートしました！

ガイダンス

2012.1.30

本校の総合学習「CAN」は，次の言葉の頭文字をとったものです。
C・・・Cluster（クラスター）異学年合同の小集団
A・・・Action Learning（アクション・ラーニング）交流学習法
N・・・Narrative Approach（ナラティヴ・アプローチ）振り返り法
総合的な学習の時間を使って，私たちの身の回りの世界すべてを対象に，興味ある内容を探究し，自らの可能性を拡げていく附属坂出中学校だけの「本物の学習」です。

CANキャン

3年　森 百合恵さん 作

C クラスター編成にMIを活用

自分のMIをチェック

研究テーマを探究していくために必要なMIの中で，自分にはないMIや，補ってもらいたいMIをもっている人とクラスター（研究チーム）を組み，互いの才能や得意分野を活かしながら研究を進めます。

MI・・・自分の才能や得意なこと

言語・・・言葉で伝える、聞き取る
論理・・・筋道立てて考える
空間・・・イメージして絵や立体で表す
身体・・・目的に応じて体を動かす
音楽・・・演奏や作曲や鑑賞をする
博物・・・原理や仕組みを調べる

研究に必要なMIをもっている人がいいな！

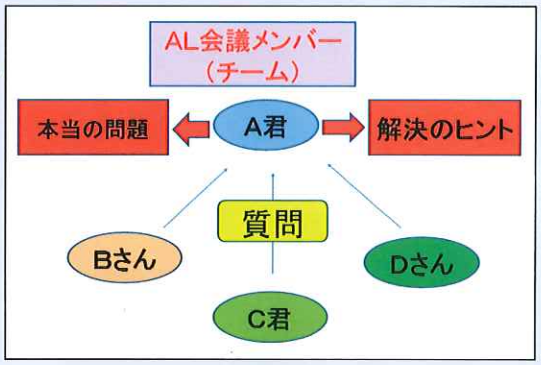
2年生

自分の才能を活かせそうだ！

1年生

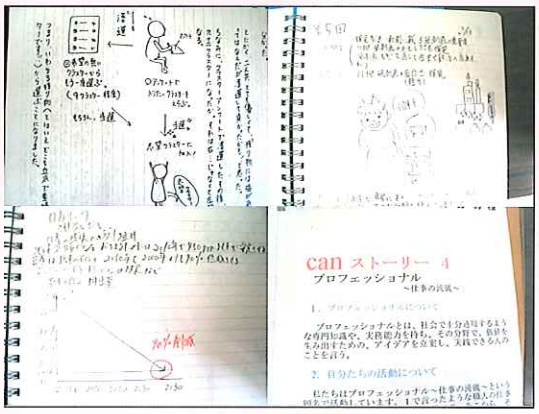
A アクション・ラーニング会議

A君の問題に対し，他の参加者が様々な質問を行います。A君はそれに答えていく中で，クラスターや自分の問題の本質が何かに気づき，解決へのヒントを見出していきます。他のメンバーもA君の問題について考えることが，自分自身の課題を振り返ることへとつながります。



N ナラティヴ・アプローチ

CANLOG ➡

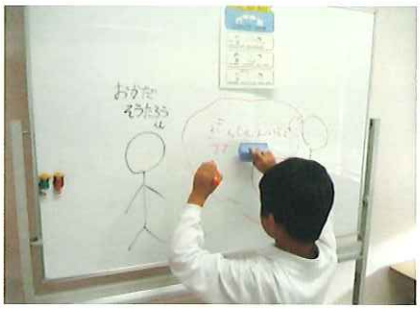


研究を振り返る「CANLOG」は自分だけの研究ノートです。そこに綴られたものは，自分だけの「研究物語」となり，自分とじっくり向き合い，過去と現在の自分を比べ，自分の考え方の変化や成長に気づくことができます。

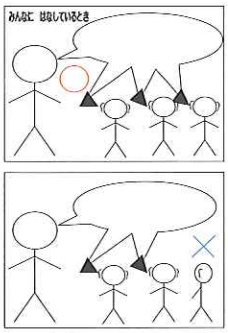
特別支援教室「すばる」での個別指導

香川大学教育学部特別支援教室「すばる」では，個別学習指導事業として，特別な支援を必要とする幼児児童生徒に対して一人ひとりの特性やニーズに応じた指導・支援を行っています。今年度の個別指導者数は56人であり，すばるのスタッフや坂出学園の兼任スタッフの先生方，県教委派遣の内地留学生，香川大学大学院特別支援教育コーディネーター専修の院生が指導を担当しました。指導内容は対象のお子さんに応じてさまざまですが，今回はコミュニケーションに関する指導事例を２つ紹介したいと思います。

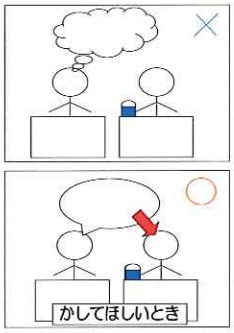
Ａさんは幼稚園の友だちに自分から話しかけたり，嫌なことを断ったりすることが難しい５歳の女児です。指導では，人形ごっこを通してやりとりの練習をしました。初めはお店屋さん役の「いらっしゃいませ。」も言えなかったＡさんでしたが，予め指導者と一緒にセリフを考えてシートに書き出し，そのシートに基づいて練習を行うことで，少しずつ自分から言葉を言えるようになりました。人形ごっこが上手になってきたので，人形ではなく実際に指導者を誘ってミニ砂場で遊ぶ設定にすると，「一緒に遊ぼう。」「それちょっとだけ貸して。」と自分から積極的に話しかけることができました。また，急にやってきた元気な友だち（指導者が動かす人形）が，２人で作った砂山に飛び乗ろうとすると，「それしたらいかんよ！」と真剣な表情で言う姿が見られました。



Ｂくんは場面に応じて話す，聞くということが苦手な７歳の男児です。指導ではコミック会話（目に見えない人の気持ちや問題状況の解決策を，線画で表わした吹き出し会話で視覚化し，理解を促す方法）を参考にして，会話のルールや場面ごとの適切な対応など，Ｂくんがイメージしにくいことを視覚化して伝えるようにしました。会話の指導では，友だちとの会話のやりとりを線画で説明したり，ロールプレイをしたりしました。ホワイトボードに線画を描き，吹き出しに言葉を書かせながらやりとりをすることで，会話の苦手なＢくんが指導者の質問に応じた適切な意見を答えることができるようになりました。ロールプレイでは，自分が考えて書いた吹き出し内の言葉を思い出して会話をすることがあり，何もない状態で意見や感想を求められるよりも答えを導きやすいようでした。コミック会話を応用した支援は，自分の言いたいことを吹き出しにすることで，話す内容や順番を明確にすることができるため，Ｂくんに会話や意思表示の方法を指導するうえで有効であると感じました。また，一斉指示を聞く時，物を貸して欲しい時等場面ごとの適切な対応については，線画を活用して“この場面ではこうする”とルールとして伝えることで理解することができていました。



一斉指示を聞く時



物を借りたい時

２例ともコミュニケーションに困難をもつ事例ですが，同じ領域に困難をもっていても，お子さんの実態や特性，発達段階等により支援の方法はさまざまです。「すばる」の個別指導で学習したことを実生活で活用できるようになるには継続的な支援が必要ですが，「すばる」での学習が実践につながる“きっかけ”となるよう，個別のニーズに応じた指導と特性を生かした支援を工夫していきたいと思います。

松韻会だより

幼稚園より

元気いっぱい，親子でミニ運動会

親子ミニ運動会は，秋に開催の附属坂出学園合同運動会とは別に，保護者も参加して行う恒例行事のひとつです。

今年は雨のため，リズム室での開催になりましたが，元気いっぱい楽しく行うことができました。それぞれ赤チームはりんごといちごのチーム，白チームはお餅と大根のチームに分かれて保護者も一緒に競技を楽しみました。園児全員でのマルマルモリモリ体操に続いて，年少は「あったかおんぶリレー」，年中は「サンドイッチボール運び＆トラックリレー」，年長は「なわとびリレー」など，みんなが一緒に，簡単なルールにそった勝敗のある運動遊びに取り組む楽しさと，体を精一杯動かして運動する心地よさを味わいました。

保護者参加の綱引きは大白熱，一年間の園児たちの成長ぶりを喜び合う保護者の声も聞こえ，大満足の一日を過ごしました。

小学校より

お話ランチボックス

毎週水曜日のお昼に，保護者（母親）による本の読み聞かせを行っています。12月７日は，お話ランチボックスのお楽しみ会がありました。今回は中学校のCANという活動で青雲賞に輝いた附属坂出中の岩井さんに特別ゲストで来ていただき岩井さん自ら作曲した曲に合わせて大型スクリーンを使い「くものともだち」という本を読みました。210名ほどの子どもたちが参加し，帰りに保護者有志の方から頂いた鉛筆のお土産をもらいました。連絡校だからこその活動ができ子どもたちも夢がふくらむ一時になりました。

卒業祝いプチコンサート

３月７日（水）に「うさぎの会」のみなさんによるプチコンサートがありました。一昨年は中学校に出演頂き，その時の感動を小学校でもとお願いをすると快く引き受けて頂きました。６年生そして保護者のみなさんは，「うさぎの会」のみなさんの演奏を聴きながら，入学した当時から今までの６年間をゆっくりと振り返り感謝や感激の温かい空気に体育館は包まれていました。

中学校より

ティーパーティー

12月11日，中学校のオープンスクール時に，松韻会土曜クラブ主催のティーパーティーを開催しました。当日は茶道部，華道部，家庭科部，吹奏楽部の先生方，生徒達の協力を得て，にぎやかな会にすることが出来ました。甘いスウィーツの香りに囲まれて，保護者間の親睦も深まりました。希少糖を使ったスウィーツもあり，先生方との話も盛り上がり，時がたつのも忘れ会話がはずみました。

例年の「１日研修旅行」の代りに，今回初めての試みでしたが，まずまずの評判にスタッフ一同胸をなでおろしました。今後も保護者同士，先生方との交流のきっかけを作っていきたと思います。

これからも，様々なPTA行事に，たくさんの方の参加をお待ちしています。

特別支援学校より

親和会の活動について

親和会会長　加賀　実

今回は親和会の活動のうち，県内外の研修に参加したものをご紹介したいと思います。

大学附属校に四附連・全附連の組織があるように，特別支援学校にも県やブロック毎にPTAの組織があり，それぞれで研修会などが開催されています。

まず，平成23年10月21日・22日と「第22回中国・四国地区特別支援学校知的障害教育校PTA連合会研究協議会」が高知大学教育学部附属特別支援学校において開催され，本校からも３名が参加しました。この会は，中国・四国ブロックの特別支援学校知的障害教育校が交流と研修を目的に，中国地区と四国地区で交代に年１回開催されています。今年は「子どもの進路を実現するための家庭教育・学校教育のあり方」をテーマに，高知大学教育学部附属特別支援学校の取り組みや，「高知ハビリテーリングセンター」での就労支援活動の報告があり，活発な意見交換が行われました。

平成24年１月31日には，「香川県特別支援学校知的障害教育校５校PTA・親の会連絡協議会」が三豊市で開催され，本校から７名が参加しました。全日本手をつなぐ育成会の副島宏克顧問から，「あたりまえに地域で暮らす～インクルージョンの社会をめざして～」と題する講演を受け，学部別（小・中・高等部）の分科会で活発な意見交換が行われました。

どの会に参加しても，保護者の真剣な眼差しやいろいろな取り組みに感銘を受けています。「子どもの事を思い，そのために保護者として何ができるのか？」はどの保護者にとっても重要な問題であると思います。そして，PTA活動はその学校がある限り継続して行くものであり，時代に応じて変化しながらも子どもたちのために存在し続けるものだと思います。

副島氏の講演の中に，「親が子どもの可能性を信じなければ子どもは進歩しない」という言葉がありました。今後とも，子どもの成長を見守っていけるPTA活動を，松韻会の皆様とともに継続していきたいと思います。

坂出学園１月～３月のあゆみ

中学校

学園教育セミナー

1月25日に，学園教育セミナーとして,「インターネット有害情報対策講座」を開催しました。「さぬきっ子安全安心ネット指導員」の方からは，携帯電話やゲーム機はインターネットの端末であり，子供は親が全く知らないうちに，有害な情報や人物に直接アクセスできてしまう。そのため，子供に携帯電話やゲーム機を与える時は絶対にフィルタリングの必要があることをご指導いただきました。テレビでコマーシャルをしているモバゲーやGREE等も決して安全ではないことがよく分かりました。

送別芸能際

3月12日に恒例の送別芸能際が行われました。今年の演劇は，1年生が「クロワッサン」，2年生が「はるふぶき」でした。早くから準備を始め，学年全員が協力して取り組んだ成果が上がり，すばらしい演劇となりました。3年生や保護者の方々からは大きな拍手が送られていました。

2年生「はるふぶき」練習風景

小学校

火災想定避難訓練

冬は空気が乾燥し，1年の内でも最も火災が起こりやすい時期です。2月1日，10時36分。非常ベルが鳴りました。校内緊急放送を聞いて，全校生一斉に体育館へ避難。どの子どもも,「押さない」「走らない」「しゃべらない」の約束をしっかりと守って，スムーズに体育館に避難することができました。その後，消防士の方から「火災から命を守るためにはどのように行動すべきか」についてのお話を聞きました。実際に救命に関わっている方の話だけに子どもたちは真剣な表情で話を聞いていました。話が終わった後は質問タイム。たくさんの子どもたちから質問が出されました。回答の中で，自分の家の住所，電話番号が言えるようにしておくこと，もしもの時の避難場所を家族で決めておくことの大切さを教えていただきました。

特別支援学校

毎年開催！かもめギャラリー作品展

2月7日(火)～14日(火)の1週間，JR坂出駅の「かもめギャラリー」にて作品展を行いました。毎年，この時期に開催しています。日ごろ，児童生徒たちが学習活動の中で制作してきた作品を展示しました。図工・美術作品，書写作品，作業作品(陶芸や絵織り，窯業や家政)など，力作ばかりです。

作品の中には,「全国特別支援学校知的障害教育校長会会長賞」を受賞した絵画作品，書写作品もありました。

今年もたくさんの方に来場していただき，アンケート記入へのご協力もいただきました。いくつか紹介します。

- のびのびと生きる力を発揮し，楽しく作品を仕上げていることが伝わってきます。
- やさしい心が伝わってきて涙が出ました。
- 素直な子どもの心が見えました。来年も見に来たいです。

毎年の開催を楽しみにしてくださる方がいらっしゃることは，大変励みになっています。このような作品展からも障害者への理解促進，啓発になればと考えています。

幼稚園

1月　おでんパーティ

毎年恒例のおでんパーティ。今年も，青組の畑にりっぱな大根ができ，種を蒔くとき「何を育てるのかな」と聞くと「おでん」と答えるほど楽しみにしていた「おでんパーティ」です。こんにゃく，ソーセージ，ちくわ，うずらの卵，そして大根を青組さんが切り，大きなお鍋に入れてぐつぐつ煮ます。小さな人たちも食べられるように大きさを考えて切ったり，美味しくなるように魔法をかけたりして出来上がった『おでん』。幼稚園いっぱいにいいにおいがしてきました。友達や先生，みんなで食べたことで心も温かくなりました。

2月　節分　豆まき

「幼稚園に鬼さんがくるかもしれないよ。でも優しくて，みんなとお友達になりたい鬼さんだから怖くないよ。みんなも鬼さんのお面を作って一緒に豆まきをしよう」ということになりました。【黄組は画用紙を折り，思い思いの表情を書いたお面】【赤組は，ティシュペーパーの箱に毛糸や色紙で角や髭をつけたお面】【青組は，廃材で工夫したお面】をつけて，幼稚園にやってきた3人の鬼さんと豆まきを楽しみました。自分の心の中にいる，いたずら鬼や泣き虫鬼，怠け者鬼などを「鬼は外」と追い出した子どもたち。暖かい春がくることを心待ちにしています。

編集後記

未曾有の大災害である東日本大震災から，はや1年が経ちました。その間，附属坂出学園でも，津波想定の避難訓練を実施したり，生徒全員分の非常食を備蓄したりするなど，防災対策は着実に前進しています。ただ，昔から「災害は忘れたころにやってくる」と言います。大切なのは，あの日のことを決して忘れず，「いつ災害が来てもおかしくない」という緊張感を持ち続けることでしょう。

3月は旅立ちの時期です。卒業，卒園される皆様方，おめでとうございます。附属坂出学園で身につけた力を，新しい場で十分に生かし，活躍されることを期待しています。

関係の皆様方，附属坂出学園に対し，厚いご支援をいただき心より感謝申し上げます。来年度も引き続きご指導，ご支援をよろしくお願いします。

発行年月日：2012年3月16日

発行事務局：香川大学教育学部附属坂出小学校内

佐藤　美芽（附属幼稚園）

宮野　真也　樽本　導和（附属坂出小学校）

寺岡　英郎　小林　理昭（附属坂出中学校）

武田　光弘　尾崎　仁美（附属特別支援学校）